
俺ん家 完結編

ユミン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺ん家 完結編

【Nコード】

N8645U

【作者名】

ユミン

【あらすじ】

俺ん家の完結編になります。次郎と華、そしてその周りの人々の成長とその後を書いた話です。

第1話 俺（前書き）

作品に思い入れをしまして、とうとう完結編まで書いてしまいました。実際に内容は随分前から固まっていたんですが、作品にするのにだいぶ時間が経ってしまい・・・読んでいただけると嬉しいです。更新には少し時間が掛かるかも知れませんがお付き合いくださいませ。

第1話 俺

俺の名前は内田次郎。

自分で言うのも何だが――

とっても賢くて忠実で、なかなか器量の良い内田家の犬だ・・・ってそんな事はもう知ってるって？

この内田家に来て、いつの間にか15年という歳月が流れていた。俺は人間で言くと、軽く80歳は超えている老犬になってしまったのだが、まだまだ気はしっかりしているぞ。

若いものに負けない様に、毎日のランニング（散歩）は欠かさず、大好きな飼い主、華の見送りお出迎えも日課だ。

「ただいま」

（お！）

今日も華が元気に帰って来た。俺は急いで玄関まで走る。

ドタドタドタ

？はあはあはあ？

「あゝ次郎ただいま」

俺は喜びいっぱい尻尾を振り、華の元へと駆け寄った。そんな俺に華は

「次郎ホントにおじいさんだねゝ何処もかしこもくたびれちゃってえゝい！」

なんて言いながら、俺の鼻に相変わらず鼻ピンを思い切りくらわした。挙げ句にたるんだ口元をひっぱる。

「むぎゅううう」

？いててて？

「よしよし」

そして最後は、なんだかんだ愛情いっぱい撫でてくれた。これが華の可愛がりだ（涙）

少しは労ってくれよ、と思うのだが・・・そこは華だ。全く容赦な

い。もう慣れたし、やっぱり華はこうでなくちゃ、と変な納得をしている俺。

自分の部屋へ行った華を追いつける。2階なので、階段が最近ちょっときつくなってきた。

やっと昇りきって華に追いつく。

「次郎、今日はね——」

華は、よくこうやって1日の出来事を俺に話してくれる。

zzzzzzzzzz

「次郎？」

（はっ！）

おつといけない。何だかとても心地良くなり、寝てしまった。この頃無性に眠たくなるんだ。座ったままいつの間にか、うとうと夢心地になってしまう事がしばしばだ。

華がじつと俺の顔を見て、優しく言った。

「お散歩こうか」

「ワン」

俺はいつもの様に、華の後ろを付いていく。

華の背中を見つめて——

「早くおいで」

そう言った華の元へと駆け寄り、華を見た。

「どうしたの？」

いや——何でもない。

ただ、華とこうしていられる普通の日々を、大切にしよう——
そう思ったんだ。

第2話　うちの家族

内田家の家族を紹介しようと思う。

まず親父さん――

最近下っ腹が随分たるんできた。中年太りというやつだ。本人も気にしているのか、休みの日はウォーキングをしている。たまに俺も付き合って行くのだが、お互い休憩ばかりしている始末だ。しかも途中にある肉屋のコロッケが旨くて、一緒に買い食いをついしてしまうからか・・・全く痩せる気配もない。

そしてお母さん――

昔っからの天然ボケは今も健在だ。こないだはドックフードの老犬用ではなくて、幼犬用を買ってきた。そんなのは、まだまだ序の口だ。この頃は字が見え辛くなってきたと言って、眼鏡をたまに掛けているのだが、よく

「私の眼鏡はどこ行っちゃったの？」

と探している。だいたい頭の上に掛けてあるんだけどな。

それから華の兄貴、佑人。

今は市外に動物病院を開いて（自称）カリスマ獣医として働いている。ちよつと？変わった兄貴だ。毎日仕事に明け暮れて、滅多に実家にも帰って来ないが、今日は久しぶりに帰ってくる。何故かと言うと――

今日はちよつとした内田家のパーティーなんだ。

「ただいま」

噂をすれば兄貴だ。

「お帰り佑人、早かったわね」

とお母さん。

「ああ、今日は急患もいなかったからね。それにしても良い匂い。お腹へこぺこだ」

「もうちよつと待ってね。もうすぐ2人共来るから」

2人とは、華と川端君。実は、2人はつい最近婚約をしたんだ。中学を卒業してから今まで、永くお付き合いをして、とうとうゴールインだ。

その川端君は、大学を出てから地方公務員を受けて、役所で働いている。今でもよく家に来て俺の散歩もしてくれるし、おやつも買ってきてくれるなかない奴だ。

散歩やおやつに釣られている訳ではなく、華の事がすごく大好きで、本当に大切にしてくれるから認めてやったんだ。

華は——と言うと（恐ろしい事に）看護師になった……。人の為に何か役に立ちたい！という気持ちが凄く強かったのは知っていたが、あの乱暴さとハチャメチャさをもって、何故看護師に？！と最初は耳を疑った。何より患者さんが心配だ——

今日は、そんな2人の婚約パーティーだ。お母さんは腕によりをかけて沢山ご馳走を作った。

くんくんくん

匂いにそそられる。お裾分けを期待しつつ。

「遅くなりました」

「お邪魔します」

そこに華と川端君がやって来た。これで全員揃った。

「さっ座って座って」

お母さんが2人を座らせる。お父さんがグラスを片手に

「みんな揃った所で、乾杯だ」

と嬉しそうに言った。

「乾杯」

（2人のこれからが幸せいっぱいになります様に——）俺も心の中で、そう祈った。

お祝いムードの中、やはり兄貴は兄貴らしかった。

「川端君・・・本当にいいのか？！」

真剣に兄貴はそう言った。

「え？！何がですか？」

戸惑う川端君。

「引き返すならまだ間に合っぞ」

「引き返すって・・・」

「お兄ちゃん!!」

華が怒って兄貴を睨んだ。

「世の中、華よりマシな子沢山いるだろう。兄としては、こんな妹をもらってくれるなんて有難いが——とても心配だ」

半分酔っ払っているのか、何なのか・・・

「もう！お兄ちゃんそんな事言っつて、自分の事を心配しなさいよ！
34歳にもなつて全然女っ気ないし」

「俺はまだまだ独身貴族を楽しむんだ、な、次郎」

（え?!）

俺に振るのか?! まあ俺は結局、一生独身の道を通つ直ぐに進んでいる訳だが——

それにしても、兄貴も本当はちょっと寂しいんだろうな、と感じた。何はともあれ、とにかく内田家に家族が増える事になり2人の結婚式は半年後の予定だ。

近くにアパートも借りて住むそうで、これから新居探しや式の準備で何かと忙しくなりそうだな。

大好きな華を俺もしっかり見送らなければ——と思いつつ・・・

第3話 約束

俺は昔、華と約束した――

？長生きしてずっと側に居るんだよ？

今から1か月前の出来事だった。

何だか朝から親父さんが落ち付かない。

（どうしたんだ？）

と、思いつつもそれから直ぐに分かった。華がスーツ姿の川端君を連れて来たからだ。川端君はやたらかしこまって、いつも以上に緊張していた。

（ああ・・・そういう事か――）

俺の予想通り、それは結婚の挨拶だった。

人間は、色々としきたりやら段取りがあるらしく――まあ犬や猫を貰うのとは訳が違うからな。その日の川端君は、穏やかな表情とは違って変わって、かなりガチガチになり、俺は思わず吹き出しそうになってしまった。

（いけない、いけない）

でも長年2人を見守っていた俺。いよいよその時が来たのか――と感慨深くなった。

実は、俺と川端君は、始めあまり良好な関係ではなく

（というか俺が嫌いだった）

それでも川端君は、変わらず穏やかに俺に接してとても可愛がってくれた。

乱暴・・・いや元気な華には、この位鈍感――ではなく、心の広い人がきつと合っているのだろう。とにかく川端君はいいやつだと思う。俺は大事な場面を邪魔しちゃ悪いと思い、庭へ出た。

芝の上に座り、空を見上げる――

俺がこの家にやって来たのは、華9才の時。あれから15年——・・。

子供だった華が、女の子、そして女性として成長していく姿をずっと見てきた。何だか嬉しい様な、寂しい様な・・・今は親父さんの気持ちが少ないだけ分かる。

（色んな事があつたもんなん）

華との思い出を想い返していた。

暫くして

「次郎」

（ん？）

川端君が1人俺の元へと来た。もう話は終った様で。さっきの顔から、だいぶホツとした顔に戻っていた。リビングでは、華とお母さんが楽しそうに笑いながら話していた。親父さんは、覚悟は出来ていたものの、ちょっと放心状態で物思いに耽っていた。

「次郎おいで」

俺はゆっくりと川端君の側へと近付き、隣に座った。

「きちんと次郎にも挨拶しないとね」

そう言つて川端君は、俺の目を見た。

「華の1番大切な友達であり、家族だから」

（まあな）

「それに次郎がいたから、きつと俺たちこうやってここまで来られた気がするよ」

ちよつと持ち上げすぎだが、多少はそうかも知れない。

（否定はしないぞ）

「華をもらつていくよ。許してくれよ次郎」

（—————）

川端君は、目を細めてそう言ったんだ。こうやって目の前で言われると、一気に現実的になるもので——

ただ、いつもは頼りなさそうな川端君が、この時はとても頼もしく

見えた。

おれは

？分かった？

と頷き尻尾を振った。

「ありがとう次郎。これから僕がしっかりと守っていくから」

その時、ふと俺は思い出した。華とのあの約束――

そして思ったんだ。

俺はあの時の約束を、これできちんと果たし終わってたんだ――と。

第4話 幸せの形？

「行ってくるね」

「気をつけて」

「ワン」

お母さんと次郎に見送られ、家を出た私。最近次郎はめつきりおじいちゃんになって、時々気付いたら居眠りしている程の気の緩み様だ。顔を見る度に老けたなうなんて思うのだけど（笑）こんなにも永い間、家族として居てくれる次郎を、私はとても愛おしく思う。

さて、今日はこれから中学時代の友達と会う約束をしている。

仲の良かったS美、凜、まいちゃん、弥生で私のお祝いをしてくれるらしい。中学時代にドSだったS美は、今はキャリアウーマンまつしぐらで、男性にも引けをとらず働いている。凜は早々と結婚をして（大学の先輩と）1児の母となっている。

弥生は地方の会社で働き、寮暮らしなのだけど、今日はわざわざ戻って来てくれるそう。まいちゃんは会社を辞めて、再就活中の身である。それぞれの状況の5人が久しぶりに揃う。

（早くみんなに会いたいな）

予約を取ってくれた店に、小走りで向かう。

「あつ華こつちこつち」

「ほらっ早く」

早めに来たのに。みんなはもう既に来ていて、私を迎えてくれた。

「やー！！久しぶり！会いたかったよ。今日はありがとう」

「さっ主役はこつち」

そう言われて、席に着いた。注がれたワインを手に

「ーでは、取り敢えず乾杯といきますか」

S美がグラスを掲げた。

「ちよっと早いですが・・・華の結婚おめでとう！乾杯！」

「乾杯！」

「乾杯！！」

卒業して10年——こうして今でも友達としていられる事が嬉しい。
「それにしても、川端君と結婚か」。同級生なんて初めてのカッ
ブルじゃない？（弥）」

「そう言われてみれば・・・そうだよ」

「他に目移りしなかった？（弥）」

「あはは。大丈夫だったよ」

「結婚後も仕事続けるの？（弥）」

「うん、今の所そのつもりだよ」

「でも、看護師って大変でしょう？（凜）」

「そうだね。仕事内容もそうだし・・・まあ色々あるよね」

「——って言うか、華が看護師って言うのが、1番信じられないかも
」（S）」

（・・・・・・）

S美の辛口が始まった。まあ色々な人に言われているけど。

「でも華ちゃんが結婚か。何だかそれが1番不思議（凜）」

（えっどという・・・）

ポツリと言った凜の言葉が、1番辛口だった。

「でも嬉しいよ（凜）」

「あっうん。ありがとう」

につこり笑う凜。深い意味はなかったらしい。

「凜はもうママだもんね。まさか学生結婚するとはびっくりだよ（弥）」

「ホント（S）」

「S美は仕事バリバリらしいじゃん。中学の時と方向性違くない？（弥）」

「ふっふふっふふふふふ」

S美が不気味に笑う。

「私を見くびっちゃいけないよ。会社で昇りつめて、部下の男性

社員達を跪かせるのが目的なんだから（S）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一同納得。

「ところでまい、どうしたの？今日は静かだね（S）」

みんなのやりとりを笑って聞いていたまいちゃん。

「羨ましいな」と思っ（ま）」

「何が（S）」

そうだ。まいちゃんは？マイナス思考のまい？と言われる程、考え方がマイナスだった。今も変わらず・・・・の様だ。

「だって、凛は結婚して幸せそうだし、華もいい人とずっと付き合いあってゴールインでしょ」。S美や弥生も仕事が充実してそうで楽しそう。なんだか私だけ・・・・（ま）」

「何言ってるの？！まだ25じゃない。これからあんだってどうにでもなるって（S）」

「そうかな」

「そう！人は良く見えるもんだよ。その人がどんな事抱えているのかなんて、周りには見えない訳だし（S）」

S美は、何だか見かけだけではなく、更に頼もしくなったみたいだ。S美の言う通り、人は誰でも周りが良く見えがちだ。自分に自信がないなら尚更。私も今迄、全く何もなかった訳ではない。それにこれから先何もないなんて、断言できる訳でもなく。ましてや結婚はゴールと思ったら違っし、今以上に多くの事を背負っ分、きつと楽しい事ばかりではないだろう。

ただ、私は心に留めている事がある――

「ねっ華！（S）」

「えっ」

「今日は沢山飲んでパァーっと盛り上がらなきゃ！」

「そうだね」

結局この日は、5人でワインを3本空け、かなりいい気分が出来上がってしまった。

「私も頑張るぞ〜!」

なんてまいちゃんも大騒ぎして、楽しい時間はあっという間に過ぎた。

翌日まで凄い頭痛で、二日酔いというものを初めて経験してしまったけど・・・

第5話 幸せの形？

それから暫くして、結婚式の準備も次第に忙しくなってきた。私達は新居としてアパートを借り、その引越し用意も進めていた。結婚式は、レストランを貸しきつてのアットホームな感じで行う事にした。大きな庭園もあり、動物もOKというのが一番の選んだ理由だったんだ。次郎にも勿論参加して欲しかったから。

「最近忙しそうだね」

職場で同僚の真知子にそう言われた。真知子は私より2つ年上の先輩なんだけれども、知り合った時から話が合い、よき友人だ。

「時には息抜きも必要だよ、たまにはどう？それでも」

そう言つて真知子は、一杯飲む仕草をした。

「いいね」

「じゃあ後でね」

私達は、シフトが合った時は、時々こうして2人で飲みに行ったりしていた。

「おつかれ！」

「おつかれ！乾杯」

この日、勤務が終わったのは21時を過ぎた頃だった。

「あゝ仕事後は美味しさが格別だわ」

真知子がしみじみ言った。

「本当。私も真知子とこうやって飲む様になって、お酒の美味しさ覚えたよ（笑）」

「あはははは、まるで私悪友ね」

そして、真知子は煙草に火を点け、煙を一つ吐いた。

「ふう……」

「今日も慌ただしかったね」

「いつもの事ながら。華は結婚式やらも控えていて、この所大変じゃない？」

「うん、上手くやりくりしないかね」

「私だったら仕事辞めちゃうな。肉体的だけじゃなく、精神的にもキツイ仕事だしさ」

「・・・・・・」

確かに――。そう思う事は私もよくあった。しかも真知子は経験豊富な分、責任も誰よりも持たされている。

「何かきつかけがないと辞めるのもなんだし、お金も必要だから続けざるを得ないって思っちゃうけどさ。他の友達とか見ると、みんな楽そうでいいな」とか選択私間違えたかなとか、この年になると色々考えちゃったり」

「――私は真知子見ていて立派だし、尊敬しているよ」

それはお世辞ではなく、本当の事だった。

「嬉しい事言ってくれるね」

真知子は笑った。

「ただ、この乾いた毎日というか――毎日同じの事の繰り返しの中で、流されて何も得られてない自分が居る気がする」

「私もそういう時あったよ」

「えっ？華も？」

「勿論、私だって人間だもん（笑）しかもこんな人の生死に関わる仕事の中で、やるせない気持ちや行き詰まり、自信喪失、人間関係・・・何もかも嫌になって叫びたい位だった」

私はグラスを見つめてそう言った。

「そっか」

「ある日ね――1人の患者さんのおばさんと知り合ったの」

そして、私はある患者さんとの出会いを話し出した。

知り合ったのは、私が働き始めて1年、内科病棟に移ってすぐの事だった。

「その方は、まだ50歳位の相馬さんという人で、よく笑う人だっ

たな・・・同じ病室の人をいつも笑わせていたの。私はてつきり症状も軽いのかと勘違いした位。けれど違った」

「重かったの？」

「うん、余命3ヶ月の末期癌だった」

その頃私はこの仕事に行き詰まりを感じていて、自分の無力さや目まぐるしい忙しさに、すっかり余裕をなくし道を見失っていた。辛いという思いだけで、何かが見えなくなっていた。

元々1人で抱え込む癖がある私は、どうしても我慢しきれなくなり、病院の屋上で声を殺して泣いていた日々だった——そんな時

「泣いてばかりじゃ何も変わらない、ほらっ顔をあげて」

それは相馬さんだった。私が屋上に行く姿を、何度か見ていたらしくて。

「同じ1日笑つても泣いても同じ時間が過ぎていくんだよ。だって笑った方が得じゃないか」

そうして、私に笑顔を向けてくれたんだ。

「1つ面白い話をしてあげるよ」

相馬さんは、私をベンチに座らせて話してくれた。

「曼荼羅華っていう花のお話」

「曼荼羅華??」

「仏教に出てくる花なんだよ、それは。花びらがすごく小さいんだ。だけどその花びらを囲むガクがとっても大きくて、花が咲いているのかいないのか・・・注意してみないと分からない」

私は静かに聞いていた。

「けれども確実に咲いているんだよ」

分からないけど、確実に咲いている花——?

「見る人次第って事、何でも」

「見る人次第・・・」

「どんな嬉しい事もチャンスも、縁もしいては幸せも・・・全て同じ位目の前にある。ただ見る側が気付かない、そのまま通り過ぎて

しまつて、気付こうとしていないだけなんだよ」

私はその時ハツとしたんだ。自分が今、どれだけ周りが見えてないかって事に。

「前を見なさい。もっと色々目を凝らして、大切な事を見逃すんじゃないよ」

「――はい」

「それから、人間は必ずそして確実に死に直面する」

「・・・・・・・・・・」

「誰も怖くないと言つたら多分嘘になるだろうね。でもこう思うんだよ。1日疲れたら内田さんも寝るだろ？」

「えっはい」

「死も次に産まれる為の睡眠と一緒になんだってね」

「・・・・・・・・・・」

そんな風に考えられるなんて本当に――

「だから、可哀想なんて見ないで、しっかり見送つて下さいね」

「相馬さん・・・・」

「それが、今内田さんには出来るんだから。あんたに与えられた仕事だよ。小さな事に一喜一憂している場合じゃないよ。ほらっ」

バシッ！！

「いったゝ！」

思い切り相馬さんにお尻を叩かれた。目が覚める気持ちだった。

この人との出会いも私にとってきつとかけがえのないもの――

そしてどんな人も、患者さんもきつと――・・・・・・・・

私は、相馬さんの言葉をずっと心に留めておこう、留めておかなければ、とこの時思つたんだ。

「――・・・その患者さんは・・・・どうなったの？」

真知子はちよつと聞きづらそうに聞いてきた。

「――うん・・・・それから程なくして亡くなったよ。沢山の人に惜しまれてね。けど凄く穏やかな、そう本当に寝顔みたいだった」

「そうなんだ」

「きつと、相馬さんは病気にはなっただけ、とっても幸せな人生だったんじゃないかな。人の幸・不幸は自分の心で決まると教えてもらったよ。だから私は、この先も精一杯頑張りたい」

「・・・凄い人だったんだね」

「うん、出会えて本当に良かった」

一期一会の出会い、出来事や言葉、そして自分の考え方次第で何かが変わっていく――

人それぞれ幸せの形も――

誰かと比べる事などない

自分を卑下する必要も

焦る気持ちも

今を1日1日大切に生きて行く。そこにきつと見えてくるものがあるから。

第6話 ご近所近況？

「次郎お散歩行くよ」

「ワン」

（待つてました）

華の呼びかけに、元気よく応える。早番で帰って来ていた華と、久しぶりの散歩。

華が社会人になってからは、なかなか一緒に——ってのも難しくなり、けれども出来る限りこうやって連れていつてくれるんだ。

「おや、散歩かい？」

垣根から顔を出してそう言ったのは、お隣の虎蔵さん。

「こんにちは」

「すっかり次郎もおじいさんだね」

（虎蔵さんには負けるけどな！）

虎蔵さんと奥さんの熊さんは、今も健在でとっても元気だ。

暫く行くと、昔よくお世話になった華のお姉さんの存在の沙弥香さんの家だ。今は遠くへと嫁いだらしく、飼っていたミルクという白い猫も一緒に連れて行ったらしい。ミルクは小さい時、よく俺も面倒を見てやったんだ。

沙弥香さん家の角を曲がると、商店街の入り口が見えて来た。ここは誘惑通りで、色々な良い匂いがしてくる。その途中にある美容院は、華が高校生の時まで髪を切ってもらっていたんだが、今はその太田おばさんもお店を閉めて、隠居生活をしている。ここにはソフィーという物知りでとても優しいブルドックがいたんだが、数年前、天国へと行ってしまった。

今でもソフィーに教えてもらった事が、俺にとって為になっている。

「次郎疲れた？」

華が振り返って言った。

（大丈夫だ！）

少しペースダウンした俺を、氣遣う華。

（まだまだ此の位！）

俺は早足で歩く。

その時

ガシツツツ！！！！

「ワン！！！！」

（何だ？！）

俺はいきなり後ろから驚？みにされた。

「隙あり！！！！」

「あ！！」

（あ！！）

「創太！！」

（悪ガキ創太）

「よっ華！」

「こらっ呼び捨てにするな！」

当時、こちら辺でも有名だった悪ガキ創太も、今は高校生――

「次郎も元氣そうだな」

（まあな）

「学校帰り？」

「そっこれからバイトだよ」

「頑張つてね！」

「おう！じゃあな」

人は、どうなるか分からないもので――・・・あの創太が、今は家計を助ける為に頑張つてバイトして、そして何よりかなりのイケメンになっていた。

「あの創太がね――」

呟く華。そうだ、あの創太が・・・だ。

そのまま行くと、土手が見えてきた。

ここ一帯は、昔ゲンという野良がリーダーとなり、沢山の野良犬達を束ねていた所だ。あの頃よりだいぶ野良は減ったが、それでもま

だ時々数匹の犬を見かける。

サワサワサワ・・・

草木が風に揺れて、あの頃と同じ匂いがした。

ゲンはどうなったか分からない。ただ、もう見かける事もなくなつた事を考えると・・・

俺はゲンの強い眼差しと、言葉を思い出していた。

本当にカッコいい奴だったんだ。

第7話 ご近所近況？

暫く土手沿いを歩く――・・・

この先の家には、とても大きくて騒がしくて暴れん坊の犬が居た。
今は――

「随分静かになっちゃったね」

華は、その家の前で立ち止まった。誰も居ない空き家がひっそりと佇んでいた。

「平蔵さんもいなくなっちゃって――・・・リキは何処に行っちゃったんだろう」

(・・・・・・)

俺は静かに家を見上げた。

平蔵爺さんは、2年程前に亡くなった。最後は家族も駆け付けてくれて、いつもの様に悪たれをつきながらも？ありがとう？と言って眠りについたらしい。

その日の夜、俺はリキが少し心配になり、こっそり見に行ったんだ。リキも平蔵爺さんがいなくなった事は分かっていた。そしてリキは俺に言った。

「お前にこんな事を頼むのも何だが・・・・この鎖、引きちぎるのを手助けしてくれ？」

それはリキの最初で最後の頼みだった。平蔵爺さんが亡くなった今、リキにはここにいる意味が無くなったのだ――・・・と。

俺は迷ったが・・・・きつとこの先、リキは平蔵爺さん以外の人に、心を開く事はないと感じていた。それに、引き取る人さえも、現れないかも知れなかったんだ。

？分かった？

？ありがとよ？

そして、俺とリキでやっとの事で切れた鎖を見ながら、お互い初めて笑い親近感さえ持てた。これまでリキとは全く分かり合えなかつ

たのに――

？俺は幸せだったよ。お前も幸せにな？

そう言つて、リキは夜の闇へと消えて行つた。

それからリキがどうなつたか誰も知らないけれど、きつと平蔵爺さんとの絆を胸に、今も何処かで生きていると信じている。

「次郎行くよ」

華に呼ばれて、その場を後にした。

「わんわんわんわんわんわん！！！！！！！！！！」

(！！)

凄じ騒がしく前からやつて来たのは、チーズ・・・ではなく、ペルとその家族だった。

「こんにちは、まなちゃん」

「こんにちは」

ペルは昔華が一時引取り、田山まなちゃんに貰つてもらった迷い犬だ。

？ペル元気そうだな？

？おじさん久しぶり！ほらっお前達もおじさんに挨拶は！？

ペルは3匹の子供達にそう言つた。(と言つても、ペルも充分おじさんだし、ちなみに子供達も立派な成犬だ)

？こんにちは？

？こんにちは？

？こんにちは？

？ぶつ、みんな同じ様な顔しているな？

思わず笑つてしまう。

ペルは、まなちゃんの所へ引き取られ、その後犬好きの家族はメスの犬ランランを貰つて来て、ペルのお嫁さんとして迎えた。ランランは早く死んでしまつたんだが・・・ペルと子供達は、元気に過ごしている。

「またね！まなちゃん」

「はい！」

？じゃあな？

？また？

ペル達と別れ、散歩を一回り終えた俺と華は、家へ向かった――。

「キー――！！！！キー――キー――！！！！」

（あつ――！！！！）

「あつ――！！！！」

1人強烈なキヤラを忘れていた。

「キー――！！」

聞こえてきたのは、下手なギターの音。右隣の家の慶司だ。

「こら――！！慶司！近所迷惑でしょ――！！もっと音下げなさい――！！」

おっと、今日はどうやら母親に怒られている様子だ。

「ぶっ相変わらずだね」

華も思わず笑ってしまう。

慶司は音楽好きが高じて、とうとうライブハウスで働く様になった。もちろん時々自分のステージも行っているそうで――腕前はご覧の通りで相変わらずらしいが、本人が生き生きとしているから良しだ。

そんなこんなで、うちのご近所さんは今はこんな感じだ。

第8話 結婚式までもうすぐ

夢を見た——とっても不思議で幸せな夢。

華や家族、川端君、そして今は亡きお祖父さんお祖母さんも出て来て、みんな楽しそうに笑っている。勿論俺も華の隣にしっかりと居て、笑うみんなの回りを走ったりして。

やがて時は流れて、華に子供が産まれて、その子が俺に笑いかける。小さい頃の華にそっくりな笑顔のその子も、やがては大きくなり、そしてまた次の世代へと続いていく……

「次郎！次郎ってば！！！」
びくっ！！

「また寝てる！」

（悪い悪い）

耳元で華に大声を出され起きた俺。最近では寝てばかりで、こうやって華に無理矢理起こされる事も多くなったが——ところで何だ？華がにやにやしているぞ。

「じゃ~~~~ん！」

（ん？）

「次郎の衣装が出来ました！」

（いしょう??）

「似合うかな？」

そう言いながら、華は半分寝ぼけた俺に、何やら蝶ネクタイとベストを着させた。

「んぐぐぐぐぐぐぐ」

（ちよっときつい様な……）

「どう次郎？」

どうっ——って言われても、これは何だ？俺は歩いて鏡の方へと行こうとした。

ビリッ!!!

「あゝ!!!」

(あつ)

切れた・・・縫い目の所が一気に。

「ちよつと小さかったかな」

(いやかなりだ)

「次郎太つたでしょ？」

(俺のせいかな?！)

「まあ仕方ない。何とかするよ」

華は、裁縫道具と布切れを持って来て、縫い始めた。

(ところで・・・何の衣装なんだろう?)

俺は覗き込んで見ていた。

「私の結婚式、次郎もおめかしして出席しないとね!」

(ああそうか!)

華の結婚式に俺が着ていく服か——華が心を込めて作ってくれている。とっても嬉しかった。

「あれっちよつと布が足りないな。あつそうだ、これで良いや」

ぶつぶつ1人で呟きながら裁縫する華を、俺は心配そうに見ていた。そう言えば、華って裁縫得意だったかな・・・?

「でゝきた」

(随分早っ!)

あつという間に出来た・・・——つぎはぎだらけの衣装が。

「どうかなゝパッチワークみたいでいいかも」

(・・・)

物は言いようである。華は再び俺に着せた。

(おっ)

見栄えはいまいちだが、サイズはぴったりだぞ。

「OK!これでよし!もしまだ切れちゃったら、安全ピンで留めれば良いよね」

全然それでも構わないが、華の場合、安全ピンで服と俺を一緒に刺

しそうな気がするのだが・・・ただの取り越し苦労か。
何はともあれ、俺は衣装来て鏡で見る。

（ふむふむ）

やはりモデルが良いからか、なかなか格好いいぞ。

華の結婚式が楽しみだな。結婚式までは、早いものであと一ヶ月・

・

きつとみんなの笑顔が沢山の幸せな結婚式になるのだろうか。

そんな事を考えながら、俺はまた眠るのであった。

第9話 形あるもの

「あゝ大変」

私は、ごったがえした部屋を見つめて、ため息交じりに言った。

引越しも控え、少しずつ荷物を詰め込んではあるのだが——一向に片付かない。

懐かしい物を見つけては、時間を忘れてつい見入ってしまったり・

・
「この写真懐かしいな、ね！次郎」

「ふわ~~~~」

欠伸で応える次郎。次郎は私が結婚して引っ越すのを、分かっているのかいなのか……

けれども、私が家に居る時は、片時も離れずこうして側に居る。

アパートには、次郎は連れて行けない——次郎と離れる事、それが一番気掛かりなんだけど。

「まっ近いし、いつでも来るからね」

「わん」

私は次郎の頭を撫でた。結局、アパートに引っ越すとは言っても、うちから自転車で行ける距離なんだけど。

数時間後——

やっとの事である程度片付いてきた。

次郎は相手をしてもらえず退屈なのか、散らかった小物をくわえては、私に渡す。

（もしかして、手伝っているつもりなのかな？）

「ありがとうね、次郎」

「わふわふ」

（調子に乗ってる？）

次郎は色々くわえて、私の所に次々と持ってきた。そして今度は机

の上に飛び乗り、飾ってある写真盾をくわえた。

(あ)

それは次郎が家に来る前に飼っていた、一郎の写真。

「ちょ……！気をつけて！」

と、言った先から

ガシャーン……

(……やっぱり)

落とした。割れ目の入った写真盾を見つめ、次郎は恨めしそうに私を見た。怒られると分かっているからだ。

「こら……もう！」

そのうち、うな垂れてみせる。

「危ないから離れてて」

すっかり気落ちした？様子でしぶしぶ離れる次郎を見て、もう怒る気もしなくなった。

私は落ちた写真盾を手にした。一郎が天国へ行った時から使っていた物。よく今迄持ったな……なんて思いながら。

「形ある物は、いつか壊れちゃう日が来るからね……」

何気なく呟いた一言。この写真盾も……一郎の様に命あるものも、いつかは……

その時、私は不意に不安に襲われ、次郎へと視線を移した。不思議そうにこちらを見る次郎。

「さっ、あと少し頑張らないと！」

私は、その漠然とした気持ちをかき消す様に、再び荷造りに取り掛かった――

第10話 華の結婚式？

ポカポカとても暖かい陽気だ。こんな日は、庭でボケくつと・・・とは今日はいかない。なぜなら、今日は待ちに待った華の結婚式なんだ。

「次郎、準備大丈夫ね」

とお母さん。

華が作ってくれた衣装に身を包んで、ソファーに座って待つ俺。

（いつでも大丈夫だぞ）

一足先に、華は式場へと向かった。花嫁さんは色々と準備が大変なんだと言っていた。

しかも

「行つてきまゝす。後でね」

なんて、まるでただどっか行くみたいなの、いつもの調子で行った。

（まあ華らしいな）

「あれ？お父さんは？」

お母さんがふと気が付き、キョロキョロする。

（そう言えば見当たらない）

ブルブルブルブルルル

（ん？）

愛車の音が響く。既に用意が終って外で待機していたらしい。いつの間に・・・

相変わらず気配を感じさせない親父さんだ。

お母さんと俺も外に出た。兄貴とは向こうで合流だ。

「さっ行きましよう」

「ワン」

いよいよ出発だ。

車を走らせ30分。

着いた会場は、邸宅の様な綺麗なレストラン。しかも庭は芝と木々がとても手入れされていて―

くんくんくん

思わず俺はマーキングしたくなってしまったが、ダメだダメだ。今日はお行儀良くしている様に、華に言い聞かされてきたからな。

「あつ佑人こつちよ」

「おつ次郎もおめかししてきたのか」

（まあな）

兄貴もちょうど着いた。

「次郎は暫くここで待っててね」

お母さんに言われて、俺は入り口にあるベンチで待つ事になった。

（あゝ眠い）

「あつ次郎?!」

びくっ!!

一気に目が覚めた。この声は―!!!!!!

「やゝ久しぶりじゃない」

「あつ本当だ」

S美!!と凜。この2人は、華の中学時代の友達で、よくうちにも来ていた。

「次郎??」

（?）

「まさか華の所のワンちゃん?」

（?）

えっと・・・この2人はまいちゃんに弥生?か―よく話では聞いていたが、初対面だな。

「相変わらずだねゝ次郎ゝ（S美）」

なんて言いながら、S美はくしゃくしゃと俺の顔を撫でた。S美も相変わらずだ。

「衣装なんてきちゃって可愛いね」

おつとりと凜は言った。

「これ絶対華が作ったたでしょ?! 凄い適当だもん(S美)」

(.....)

そして、嵐の様にその集団は去って行った。次々と招待された人が俺の前を通る

「かわいい」

「よしよし」

なんて言ってくれるんだ。何だか、俺が主役みたいで華には悪いな。

(!!!)

ふと気が付くと、目の前にとびつきり可愛い子が立っていた。
にこつとその子は笑った。

(うわゝこんな可愛い子・・・)

いやー華も可愛いぞ。取って付けた様に言う訳でなく・・・だけど、華の可愛さとは違う・・・っていうかオーラみたいなものが半端ない。

「麗美、何してるの?」

「あつはゝい」

(麗美?!)

麗美と呼ばれたその子は、足早に去って行った。

麗美ってーもしかして川端君の幼馴染の。そうだ! 思い出した。よく華が言っていた。凄く可愛くてフランス人形みたいな子がいるって。

川端君とその子の仲を、華は凄く気にしていた。俺は華には華の良さが沢山ある、とずっと思っていたけどな。

おっあそこに見えるのは亜美ちゃん。華の小学校以来の親友だ。? がんも? という名前の犬の飼っていて、こいつがまたちょっと可笑しな奴だったなゝ

その時

「次郎ゝ写真撮るから一緒に行くわよ」

お母さんに呼ばれて、俺は付いていった。

大きな扉の前まで来た。華の香りがする。きつとこの先に、華がいるんだな。

バタツ・・・

(――！)

「あつ次郎、早くおいで」

花嫁姿の華が呼びかける。

(・・・・・・)

「次郎？」

(・・・・・・)

ガラにもなく感動――だって華はすごく綺麗だったから。純白のドレスに身を包み、本当に清楚で、でも華やかさもあって、とても良い香りがした。まるで別人みたいに・・・

「次郎ってば――！」

ぐにゅっ！！！！

(――！)

華は近寄って俺の鼻を摘んだ。

「どうしたの？私だよ、もしかして分からないの？早くきなつてば――！」

やっぱり華だった・・・間違いない。

「次郎おいで」

川端君もいつもと違う感じのスーツを着て、何だか不思議――

「写真撮りますよ」

カメラマンの呼びかけに、俺も華の隣の特等席に座る。

「皆さんいいですか――一番良い笑顔で。はーい撮りますよ」

パシャ

ニコっと俺も笑ってみた。勿論とびきりの笑顔だぞ。

第11話 華の結婚式？

そして、披露宴が始まった。

川端君は、緊張しまくっていてガチガチになり、俺は笑いそうになった。

華はケロツとしている様にも見えたが、案外内心は、かなりドキドキだろうな。

俺は親族席の近くに席を構えて（と言っても犬用クッションだけど）今日はとても贅沢で、ご飯をたらふく食べさせてもらっている。VIP待遇だ。

（あゝ幸せ）

その後、庭でのデザートバイキングを皆が楽しんでいる中、俺は暖かい芝の上で一眠り――

Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z

飲んで食べて寝て・・・極楽だ。

なんて、やっている間にとうとう式も終盤――

友達の余興で盛り上がり、スクリーンでは2人の生い立ちや歩み、出会いから今迄映し出されていく。色々な人と関わり支えられて、ここまで来たもん・・・

ちよつと感動に浸りつつ。

華からは毎日の様に何でも聞いていただけに、まるで自分の事のように思いつかれる。

今迄、長い様であつという間だったな。

（しみじみ）

両親への手紙は、何とも華らしいあつけらかなとした内容の物だった。

けれども、俺は知っているぞ。華は、涙や言葉に表すのがとても恥ずかしくて―でも、それ以上の想いを胸に秘めている事。

家族、友人、関わってきた全ての人をどれだけ大切に思っているか。

（まあ乱暴な所が多々あるから、俺も最初はびっくりしたけど）

その想いは、しっかり伝わっているんだ。勿論俺にもな。

そして、式は滞りなく終った。

親父さんもお母さんも―そして兄貴も幸せそうな顔だ。

それにしても、結婚式は良いもんだな。別にご飯が沢山食べられるからではないぞ。

お世話になった沢山の人が、自分達の為に集ってくれる。そしてその人達に最大のおもてなしをして、みんな喜んで式を楽しみ、幸せをもらって帰っていく。

みんなの笑顔が溢れている―

良かったな華&川端君。

本当におめでとう。幸せになるんだぞ！

俺は空を見上げて深呼吸した。

何だかとても心満たされた気持ちになった。

華の幸せそうな笑顔を見届けられて、俺もとても幸せな気分だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8645u/>

俺ん家 完結編

2011年12月8日11時53分発行